



## 2013 年頭所感

# CIFの素晴らしさ、人しれぬ底力に感激しています

小池嘉夫

1964年 クリーブランド

CIF Japan の会員のみなさま

遅蒔きながら新年おめでとうございます。今年もどうぞ宜しくお願いいたします。

私は昨年一年は病院暮らしと在宅がほぼ半々の生活を余儀なくされましたが、今年は安全運行に努め易々とはスリップしないように在宅の記録を伸ばして行きたいと年頭に祈願したところでした。ただ、「棄てる神あれば拾う神あり」で、どんな病状にもそれ相応の対症療法があり、それだけでなくその上に少しばかりのプラスアルファがあることを教えられました。この力が何処からやってくるのか、特定の宗教に関わっているわけではありませんが、この頃はある種の「祈り」と関係があるように体感しております。そしてそのことに感謝しております。

C I Pに関してクリーブランド滞在中のことで、今ごろになって鮮明に思い出されることがあります。それは数多い事象の中の一つに過ぎませんでしたが、今となっては戦慄を覚えるほど鮮烈なものです。多分、C I F Int'lの前会長イタリアの Mimmo Merora 氏からの何回かのメールによって今まで眠っていた記憶が蘇ったのでしょう。そして連鎖的に真崎頌也さんが作成された「C I Pの活動」(記録映画)の中でも同様のテーマが扱われ映像化されていたはずだった、と連想が繋がっていきます。それらについて書きます。それはイスラエルからの participants とエジプトからの唯一の participant とのクラッシュでした。クリーブランド滞在中から両者の間に不穏な雰囲気があるのを感じていましたが、プログラム最後の2泊3日のワシントン滞在中にとうとう爆発してしまいました。プログラムの反省会の際に起ったことで、延々40分に及ぶ双方の応酬で、両者の言い分を聞き放しで許していたオーレンドルフ氏にも他の都市プログラムのディレクターから後に非公式の非難があったほどでした。当時は国際関係や国際政治に疎く、また英語の聞き取り能力にも問題があつて、私は両者の言い分をよく把握できませんでした。しかし仲よくしていたイランからの参加者の助け(事後の解説)を得て概要を次のように理解しました。

エジプトの参加者は「エジプトの指導者たちはパレスチナ問題についてイスラエルとの仲裁を意図している。ところが君たちの方はそれに便乗している。和平を掲げながらそのかげでやっていることはパレスチナ人の集落の買占めであり、物理的破壊であり、パレスチナ人追出しそのものではないか。パレスチナ人に何処へ行けと言うのか。我々がスラム地域の Daycare Center を訪問したときに、君たちの仲間はセンターの周辺で酔払っていた失業者を侮蔑していたではないか。それが今日の反省会での私の問題提起だ。君たちはユダヤ資本に操られている民族差別者だ。アメリカでいったい何を学んだというのか。どこの世界に『此処は二千年以上も前に我らの先祖が住んでいた土地だ。だから此処はもともと我らのものだ。』などと不法を合理化している民族がいるか。私は国の指導者たちと違ってイスラエルの不法を糾弾する立場だ。」



小池嘉夫さん

(2012年6月総会にて)

会員のみなさまに申しあげたいのです。  
私たちには力の限界がありますが、それぞれが出来る  
無理のない程度においてメロラ氏の呼び掛けに  
えようではありませんか。

一方のイスラエル勢は「君の発言は我らを難詰している。反省会のテーマから逸脱している。反省会に名を借りた政治的プロパガンダではないか。だから、本来、君に対応するつもりはないが参考までに次のことをお話ししておく。我らの先祖は君たちの先祖によって400年にわたって奴隷として虐げられてきたのだ。その抑圧から逃れるために大変な犠牲を払った。ようやくのことで集団としてエジプトから逃れることができた。追手の軍隊が迫ってきたが、あわやというところで奇跡が起きて軍隊は殲滅、我らの先祖はようやくユダヤの地に戻ったのだ。イスラエルは約束された我らの地なのだ。少しは歴史を勉強しておきたまえ。」

そうした発言が引き金になって両者の言い分はheat-upするばかりで際限がありませんでした。ことにエジプトの反論には迫力があって「イスラエルは後にローマによって破壊されつくして、イスラエル人は国を失い散り散りになったのではないか。それが現在まで続いているのだ。君たちはいまも国をもてない流浪の民族なのだ。」と譲りません。いずれにしろこれは私のメモと薄れた記憶を頼りにし強調して大意をまとめたものですから実際の発言はもっと婉曲的で外交的配慮がされていたはずだと思います。最終的にドイツ勢の「Friends,いい加減にしよう。私たちに今はアメリカ合衆国最後の夜の夕食を楽しみ且つ友との語らいに費やすべき大事な時間なのだ。君たちの議論は参加者にとっては一般化できないし議論に加わりにくいだけでなくendlessだ。だからもうやめよう」という動議でようやくお終いになりました。この一件は大変に不快な出来ごとでしたが、記憶の中で震んでいました。Merora氏のメールで想起した真崎さんの記録フィルムの中では、確か、シリアとイスラエルの参加者がたまたま研修中に起った両国間の「第三次・中東六日間戦争」(1967年6月出来)のため本国から呼び戻され、クリーブランドを去る日に二人が抱き合って泣いているシーンが写されていて感動的でした。今、Merora氏がイスラエルとパレスチナのために拠点づくりに腐心しておられることを知りC I Fの素晴らしさ、人しれぬ底力に感激しております。会員のみなさまに申し上げたいのです。私たちに力の限界がありますが、それぞれが出来る無理のない程度においてMerora氏の呼び掛けに応えようではありませんか。

さらにこの頃私は愚にもつかないことを考えております。私は民主主義(最大多数の最大幸福)というイズムは衆愚を導くものとして大変に疑問を持っておりました。それを喋るとだれも民主主義に代わるものがない以上は目下これに勝るものがないねだとしていつも一蹴されてきました。それに違いはないものの、それに代わるものを求めて誰が力を尽しているか不満のやり場がありませんでした。政治も経済も教育もおしなべて社会全体に哲学が貧困で、それだけでなく責任感が欠如しています。大きな組織や集団、権力財力政治力のあるところに哲学は育っていません。その意味ではC I Fの歩みは見るだけ、聞くだけで力になります。これこそC I Fの知られざる人的資力だと思います。今年は民主主義を越える(といってももっと底流にあって昔ながらあったもののように感じているのですが)イズムについて少し勉強します。少しでも成果があればと願っております。

会員各位のご健勝をお祈りいたします。また役員会の皆さま方には本当にご苦勞様に存じます。どうぞご健康と一層のご尽力を心から願っております。ありがとうございます。

(2013年1月、東京都在住)